様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２３５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６３

研究課題名（和文）タイ人の発話行為における言語随伴的な非言語・パラ言語行動に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Non-verbal and Paralanguage Behaviors in the Speech Acts of the Thai

研究代表者
萩原　孝恵（HAGIWARA, TAKAE）

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：９０７４９０５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：タイ人日本語学習者の発話には「頻繁に、繰り返し現れる」非言語行動がある。「笑い」と「舌打ち」である。これは、タイ人日本語学習者100名のOPI（Oral Proficiency Interview）で頻度が高かった非言語行動である。本研究では、タイ人日本語学習者の発話に伴う「笑い」と「舌打ち」の意味機能を探求するために、その生起環境と用法を調査し分析した。その結果、笑いと舌打ちのパラ言語情報に違いはみられるものの、(1)タイ人話者の舌打ちと笑いには日本語に存在しない意味とコミュニケーション上の機能があること、(2)発話に伴う笑いと舌打ちの出現は話し手の認知行動の現れであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
タイは「微笑みの国」と呼ばれ、タイ人の「微笑み」に対しては一般的に良い印象が抱かれるように思われる。一方、タイ人との接触場面で、タイ人の「微笑み」に対し不可解で不適切だと感じたり、日本人にとって不快で印象の悪い「舌打ち」が聞こえたりと、良くない印象を抱く場合もあるだろう。本研究は、グローバル化が進む昨今において、誤解や摩擦になりかねない、しかも日本語に存在しない非言語行動（本研究ではタイ人の「笑い」と「舌打ち」）に注目し、そのコミュニケーション行動の意味を明らかにすることによって、異文化に対する認識や理解につながる知見を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：“Laughter and tongue clicks” are non-verbal behaviors that have been observed to occur “frequently and repeatedly” in Thai Japanese learners’ utterances. An analysis of OPI data collected from 100 Japanese major students in Thai reveals that the frequency of their using laughter and tongue clicks in utterances is significantly high. In exploring meanings and functions of these two non-verbal behaviors, this research examines both the occurrence environment and the usage of laughter and tongue clicks as they emerge in Thai Japanese learners’ utterances. Leaving aside differences in paralanguage information of laughter and tongue clicks, results show that: (1) the two non-verbal behaviors, diverted from the Thai language usage, have unique communicative functions that do not exist in Japanese language culture and (2) the occurrence of the two non-verbal behaviors is a manifestation of the speaker’s cognitive behavior.

研究分野：語用論

キーワード：非言語行動　パラ言語行動　タイ人　笑い　舌打ち　生起環境　フィラー　認知行動

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

音声コミュニケーション研究においては、言語・非言語を包括的に捉えてデータを観察し分析する研究が増えている。また、コミュニケーション行動に関する研究においては、発話とキネシクスといった、複数の行動要素を統合的に捉えてその言語行動を分析するマルチモダリティ研究が盛んである。しかし、発話行為として観察される言語随伴的な非言語・パラ言語行動の生起環境に注目した研究はほとんどみられず、特に、自然発話に伴う笑いや舌打ちを一連の発話行為と捉え、その生起環境から話者の情意的・認知的行動を実証的に明らかにしようとしているものは少ない。

２．研究の目的

本研究は、タイ人の発話行為にみられる言語随伴的な非言語・パラ言語行動に着目し、それがどのような生起環境で出現したのかを調査することにより、タイ人のコミュニケーション行動の情意的・認知的な意味機能を実証的に明らかにしようとするものである。研究対象は「笑い」と「舌打ち」である。これは、タイ人日本語学習者 100 名の OPI(Oral Proficiency Interview)データで、頻度が高かった非言語・パラ言語行動である。「笑い」や「舌打ち」は通言語的なコミュニケーション行動である。しかし、これらを研究対象としているものは少なく、本研究のように、自然発話で観察される「笑い」や「舌打ち」を扱っているものはさらに少ない。本研究は、こうした非言語行動に注目し、その生起環境の分析を通して、タイ人のコミュニケーション行動の情意的・認知的な意味機能を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 「笑い」について

まずタイ人日本語学習者 100 名の日本語 OPI(Oral Proficiency Interview)データを対象に、「笑い」がどのような生起環境で現れるのかを調査した。「笑い」の出現傾向を総合的に捉えるために、KH Coder の KWIC コンコーダンスを用いて「笑い」の前後の発話を抽出し、a.出現数、b.出現域、c.出現位置、d.生起環境という 4 つの観点から検討した。その結果、「笑い」の前後にはフィラーが数多く出現していることがわかった。定延（2010:34）は、フィラーのある発話について「フィラーと結びつけている認知行動をあからさまにおこなうこと」であると述べている。定延(2010)の説明を前提とすると、「笑い」と共起するフィラーは、当該話者の情意的・認知的行動の現れと捉えることができる。そこで、これまで「笑い」を通してその生起環境を検討してきた視点をフィラーに移し、フィラーを通して「笑い」の生起環境を再検討した。また、非言語行動である「笑い」を、パラ言語行動として捉えることができるのかについては、森(2012:391)の「笑ってみせている場合はパラ言語情報。おかしさにたまらず笑ってしまっている場合は心理状態。」という分類を用いた。さらに、笑いのパターンを分類し、笑いによって表出される話者の情意的側面についても考察した。

(2) 「舌打ち」について

萩原・池谷(2015, 2016)が示した日本語 OPI データにおける「舌打ち」の生起環境について、異なる種類の会話においても同様に観察され得るのかを検証する必要があると考え、まずはタスク型会話による実験を計画した。「舌打ち」の出現に照準を合わせるためのリサーチ・デザインとして、前出した萩原・池谷(2015, 2016)の調査結果をもとに、話す内容に多少の負荷をかけるようなタスクを準備し実施した。使用言語はタイ語・日本語で、タスクごとに指示を与えコントロールした。データは全て録画したが、「笑い」は数多く観察されるものの、「舌打ち」はあまり観察されなかった。ビデオカメラを止めた直後に、日本語に存在しない「舌打ち」が観察されるハプニングも生じた。そのため、自然発話に観察されるターゲット・データの収集方法について見直しを行い、リラックスした雰囲気で自然に話せる環境を重視し、人間関係が構築されている現地の研究協力者にデータ収集を依頼した。併せて、タイ人がタイ語で話している際に発せられる舌打ちのデータ収集も行った。「笑い」同様に、「舌打ち」の生起環境にもフィラーが多く出現していたことから、視点をフィラーに移し、フィラーを通して「舌打ち」の生起環境を再検討した。また、「舌打ち」をパラ言語行動として検討していくにあたり、森(2012:391)の「意志的であればパラ言語情報。そうでなければ心理状態。」という分類を用いた。さらに、初年度に実施したタスク会話から「舌打ち」を抽出し、タイ人大学生 15 名に映像を見てもらい、記述式アンケートとインタビューを行った。この調査は舌打ちに対する意識や解釈を調べるために行った。

４．研究成果

(1) 「笑い」について

① タイ人日本語学習者はインタビューテスト中にどのくらい笑うのか（出現数）

本研究が調査した 100 名のタイ人日本語学習者において、100 名中 100 名に笑いが観察された。100 名の笑いの総数は 5225 で、上限 30 分のインタビューテスト中に一人当たり平均 52 回程度の笑いが観察された。笑いの出現数は中級-中レベルに多かった。しかし、個人差があり、上級レベルであっても笑いが多く観察される例はあった。この結果から、笑いの出現数については OPI レベルと必ずしも相関がみられないことを指摘した。ただし、中級レベルの学習者に笑い

が多く観察される理由としては、「語用論的能力（ストラテジー）」（牧野 2001:19）に対する言語的挫折が挙げられる。中級レベルではあいづちの代わりに笑いが出現したり、言い換え場面で笑いが出現したりしていたからである。
② タイ人日本語学習者の笑いはインタビューのどこに現れるのか（出現域）
笑いの約 8 割は自分のターン内で話し手行動として出現し、残り約 2 割はテスターのターン内で聞き手行動として出現していた。タイ人日本語学習者はインタビューテストにおいて、自分がターンを維持している際に笑う傾向がみられた。この結果から、先行研究で挙げられているあいづち的な笑いは、タイ人日本語学習者の場合には、OPI レベルが高くならないと出現しないことを指摘した。
③ タイ人日本語学習者の笑いは発話のどこに現れるのか（出現位置）
笑いは発話途中に挿入されるものが多く、全体の約 7 割を占めていた。出現位置別に特徴を記述すると、発話途中の笑いにはターンを維持する機能があり、フィラー・言いよどみ・繰り返しの前後に出現していた。これに対し、発話終わりの笑いは、先行研究で指摘されているような、ターン終了の合図を示唆する場合もあれば、自己完結を示唆する場合もあった。また、発話始まりの笑いは、インタビューテストでは「不適切な笑い」と解釈される可能性があることを指摘した。「不適切な笑い」と解釈され得るのは、笑いの原因や理由が説明できない笑いであることを例証した。笑いは、その出現位置によって機能が異なることを明らかにした。
④ タイ人日本語学習者の笑いはどのような状況で現れるのか（生起環境）
笑いは、「検討中」という内部状態と結びつくフィラーと共起する傾向がみられた。笑いの生起環境においてフィラーは、笑う前よりも笑った後の方が多かった。そして、笑った後で「何とか話そうとしている」話者の状態が観察されることを例証した。
⑤ タイ人日本語学習者の笑いのパターンにはどのような種類があるか（パターン）
「タイ人日本語学習者話し言葉コーパス」（https://ctjc.si.aoyama.ac.jp/index.html,2018 年公開）を利用し、出現ポイントから笑いのパターンを分類した。笑いのパターンは、a）応答の笑い、b）あいづちの笑い、c）フィラーのような笑い、d）終わりの笑い、の 4 種類であった。
⑥ タイ人日本語学習者の笑いが示すフェイスにはどのような種類があるのか（フェイス）
上記コーパスを利用して、笑いがいかなるフェイスの現れであるかを分類した。タイ人日本語学習者の笑いが示すフェイスは、a）困った状況や場面で現れる場合、b）緊張する状況や場面で現れる場合、c）謙遜したり恥ずかしさを隠したりする状況や場面で現れる場合、d）謝罪する状況や場面で現れる場合、e）悲しいと言いながら現れる場合、の 5 種類であった。
⑦ タイ人日本語学習者の笑いはいかなる認知行動の現れなのか（認知行動）
定延（2005，2015）は、心内作業という視点からフィラーを検討している。本研究では、この定延（2005，2015）の分析の視点を参考にした。笑いの直前直後に共起するフィラー群を、話者の心内作業の表出とみて検討し、「笑い」がいかなる認知行動の現れであるかを可視化した（図 1）。図 1 に基づき、笑いの一連の認知行動を説明すると、笑いは、「検討中」という状態後に出現し、笑いを契機に 4 つの状態に移行する。笑いは、対自的にも対他的にも作用し、発話権にも作用する。発話途中「、」の位置で出現すれば発話を維持する合図としてパラ言語情報となり、発話終わり「。」の位置で出現すれば発話を終了する合図としてパラ言語情報となる。しかし、こうしたパラ言語情報が他言語文化の聞き手にうまく伝わるのか否かについては今後の課題とする。

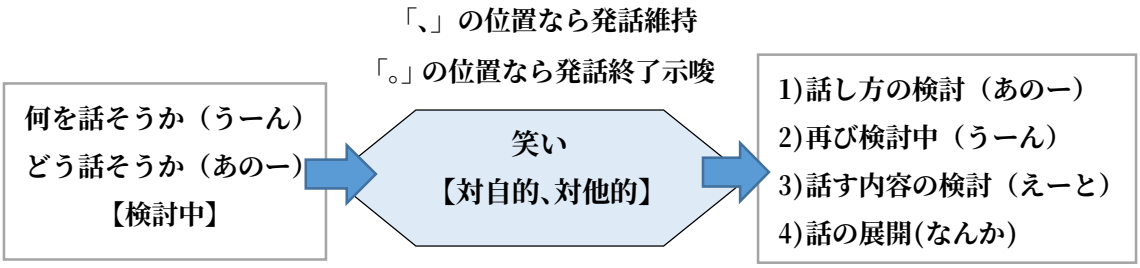

図 1　発話に伴う笑いの認知行動（萩原・池谷 2017:100）

(2)　「舌打ち」について
① 舌打ちは異なる種類の会話においても同様に観察され得るのか（多人数会話）
タイ人の舌打ちについてさらに研究を発展させるために、タイの大学で日本語を学んでいるタイ人大学生 15 名（各グループ 3 名×5 グループ）を対象に実験を行った。その様子は映像で記録し、実験自体は計画通りに進めることができた。しかし、この実験でターゲットとしていた舌打ちは、期待通りには出現しなかった。そのため、舌打ちの収集方法を再検討し、舌打ちデータの収集については現地の研究協力者に依頼することとした。データは、収集後に文字化・翻訳作業を行った。舌打ちが観察される部分の映像を切り取り、舌打ちデータとして活用できる形にした。
② 舌打ちは異なる種類の会話においても同様に観察され得るのか（2 者会話）
様々な舌打ちデータを収集することを目的として、教師-学生という 2 者会話を、現地研究協力

者に録画してもらった。会話データの中に、日本人の知らない、“ポジティブな舌打ち”が伴う発話が見つかった。これは非常に貴重な舌打ちの映像データであると考える。
③ 日本語に存在しないタイ人の舌打ちにはどのような舌打ちがあるのか（タイのドラマ）
タイ人日本語学習者に観察される舌打ちは、タイ語で慣習的に使用される非言語行動の転用であると想定される。このことを検証するために、タイのドラマを調査対象としたデータ収集に取り組んだ。その結果、日本人が発する“ネガティブな舌打ち”とは異なる“苛立たない舌打ち”を発見した。これは、日本語文化に存在しない、日本人の知らない舌打ちである。
④ タイ人日本語学習者の舌打ちはどのような状況で現れるのか（生起環境）
舌打ちは、「検討中」という内部状態と結びつくフィラーと共起する傾向がみられた。舌打ちの生起環境においてフィラーは、舌打ち後より舌打ち前の方が多かった。そして、舌打ち後に「検討中から脱却」して再び話し始める話者の状態が観察されることを例証した。
⑤ タイ人日本語学習者の舌打ちはいかなる認知行動の現れなのか（認知行動）
定延（2005，2015）の分析の視点を参考に、舌打ちの直前直後に共起するフィラー群を、話者の心内作業の表出とみて検討し、「舌打ち」がいかなる認知行動の現れであるかを可視化した(図2)。図2に基づき、舌打ちの一連の認知行動を説明すると、舌打ちは、舌打ち前の「話す内容自体を考え込んでいる」状態から、「何とか話そうとしている」状態への契機となる。この舌打ちは、発話中にフィラーのような機能を発揮して発話権を維持するのが特徴である。OPI で観察された舌打ちの多くはこの舌打ちで、「考えをまとめるための一時退却行動」として、フィラー的機能を有していた。舌打ちのパラ言語情報は、笑いと異なり、発話維持を伝えるものである。しかし、「笑い」同様に、舌打ちのこうしたパラ言語情報が他言語文化の聞き手にうまく伝わるのか否かについては今後の課題とする。

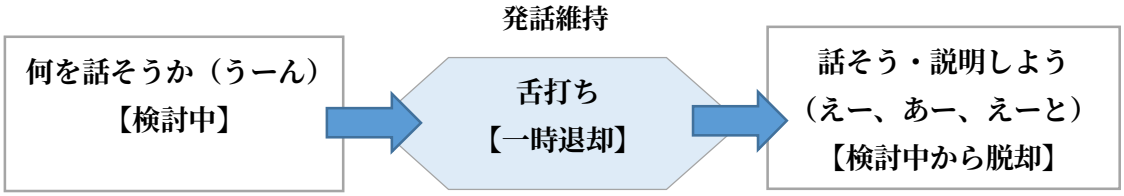

図2　フィラー的機能を有する舌打ちの認知行動（萩原・池谷 2017:100）

本研究は、タイ人日本語学習者の発話に「頻繁に、繰り返し」観察される「笑い」と「舌打ち」の分析を通して、笑いと舌打ちのパラ言語情報に違いはみられるものの、タイ人話者の舌打ちと笑いには日本語に存在しない意味とコミュニケーション上の機能があること、発話に伴う笑いと舌打ちの出現は話し手の認知行動の現れであることを明らかにした。「笑い」と「舌打ち」が具体的にどのような認知行動を表すのかについては、図1・図2のように可視化した。以上の研究成果は、論文3本、国内外での口頭発表9本という形で公表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）
①萩原孝恵「笑いの異文化コミュニケーション―タイ人のフェイスとコミュニケーション・ストラテジー―」『第3回国際シンポジウム紀要―グローバル化時代における日本語教育と日本研究―』pp.69-80、2018、査読有
②萩原孝恵、池谷清美「タイ人日本語学習者がインタビューテストで笑うとき」『山梨県立大学国際政策学部紀要』第13号、pp.47-57、2018、査読無
③萩原孝恵、池谷清美「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い―タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴―」『2017年第11回OPI国際シンポジウム台湾大会』pp.96-103、2017、査読有

〔学会発表〕（計9件）
①萩原孝恵「笑いの異文化コミュニケーション―タイ人のフェイスとコミュニケーション・ストラテジー―」、『第3回国際シンポジウム　グローバル化時代における日本語教育と日本研究』2018.10.17、ハノイ大学（ベトナム）
②萩原孝恵、池谷清美「苛立たない舌打ち―タイ人のマルチモーダルインタラクション―」ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会 Venezia ICJLE 2018、2018.08.04、Ca' Foscari University of Venice（イタリア）
③萩原孝恵、池谷清美「日本人は気になるんですけど…―発話に共起するタイ人日本語学習者の舌打ち―」タイ国日本語教育研究会第30回年次セミナー分科会、2018.03.17、国際交流基金バンコク文化センター（タイ）
④稲積宏誠、萩原孝恵、池谷清美「タイ人日本語学習者に特化したOPIレベル情報付き話し言葉コーパス公開とその利用方法」（共同：青山学院大学総合研究所プロジェクト）、タイ国日

本語教育研究会第30回年次セミナー分科会、2018.03.17、国際交流基金バンコク文化センター（タイ）
⑤萩原孝恵「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い―タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴―」日本語 OPI 研究会「OPI 国際シンポジウム in 台湾報告会」（依頼）、2018.03.10、文京区区民会議室
⑥萩原孝恵、池谷清美「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い―タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴―」2017年第11回OPI国際シンポジウム、2017.08.05、淡江大学淡水キャンパス（台湾）
⑦稲積宏誠、萩原孝恵、池谷清美「タイ人日本語学習者に特化したOPIレベル情報付き話し言葉コーパス公開に向けて」（共同：青山学院大学総合研究所プロジェクト）、タイ国日本語教育研究会第29回年次セミナー分科会、2017.03.18、国際交流基金バンコク文化センター（タイ）
⑧萩原孝恵、池谷清美「タイ人日本語学習者の発話に現れる『笑い』の分析―日本語OPIデータの生起環境より―」Bali International Conference of Japanese Language Education 2016、2016.09.10、Bali Nusa Dua Convention Center（インドネシア）
⑨稲積宏誠、萩原孝恵、池谷清美「OPIデータの文字化作業における2次チェックの問題点について」（共同：青山学院大学総合研究所プロジェクト）、Bali International Conference of Japanese Language Education 2016、2016.09.10、Bali Nusa Dua Convention Center（インドネシア）

〔その他〕（計2件）
①2018年3月、タイ人日本語学習者に特化した話し言葉コーパス公開
「タイ人日本語学習者話し言葉コーパス（CTJC: Corpus of Thai learners' Japanese Conversation）」https://ctjc.si.aoyama.ac.jp/index.html
稲積宏誠（研究代表者）、萩原孝恵、池谷清美（研究分担者・客員研究員）、ほか7名『タイ人日本語学習者の学びを支援する―書く能力・話す能力向上へ向けたICT活用と日本語教育のコラボレーション―』（青山学院大学総合研究所プロジェクト）
②稲積宏誠（研究代表者）、萩原孝恵、池谷清美、ほか7名『タイ人日本語学習者の学びを支援する―書く能力・話す能力向上へ向けたICT活用と日本語教育のコラボレーション―』（青山学院総合研究所報告論集）、2018年3月

６．研究組織
(1)研究分担者
なし

(2)海外研究協力者
池谷　清美（IKETANI KIYOMI）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。